

「これはなるほど良い御療治でございます」などの問答が描かれている。

麻酔の歴史ではB.C. 5000~2500にヒヨス、マンドラゲ、ケシ、コカを用いた局所作用から1943年に塩酸リドカイン合成までを紹介した。以下はその中からの抜粋。

バビロニアの楔形文字の記録B.C. 5000~2500
写真：人類が人体に薬を用いた最初の記録とされる。ヒヨスの粉を齧窩に詰めると除痛すると記載されている。

歯科医H. Wellsの笑気ガス麻酔、「外科の夜明け」より：ウェルズの診療所で彼が笑気ガスをすってぐったりして臉が閉じ、助手リグズが抜歯鉗子を掲げている光景。この時は成功したが、1845年マサチューセッツ総合病院(MGH)の手術室での公開抜歯術では、患者が悲鳴をあげたため「インチキ」と評価され、屈辱に苛まれ、後に自殺に至った。

歯科医W.T.G. Mortonのエーテル公開手術1846年10月16日絵画：今回はMGHのエーテルドームに飾られているものと、外科の夜明けに掲載されているものを対比した。それぞれ左右から描写されているので、患者の体位やモルトンの麻酔、外科医の手術時の格好などが詳細にわかる。

歯科の歴史は痛みとの戦いの歴史であり、これに対処する麻酔の歴史でもある。ボストンにあるモルトンの記念碑には「吸入麻酔法を創案し世に知らしめた人。君が現れる以前は常に手術は苦悶そのものであった。君により、手術の疼痛からのがれ、疼痛は去った。君が現れてから、科学は痛みを征服している。」と書かれている。今回の絵画を通じて、時代の背景とともに、歯の痛みの捉え方と麻酔による疼痛除去法の歴史が垣間見られたことであろう。

(平成19年12月例会)

魯迅が『藤野先生』に書かなかったこと

坂井 建雄

魯迅の『藤野先生』は、仙台医学専門学校の解剖学教授、藤野厳九郎から授業ノートの添削を受けた学恩を記し、その人格を称揚する作品である。2005年末に北京の魯迅博物館から授業ノートのデジタル画像が供与されて、魯迅の仙台時代についての研究が大きく進展した。

魯迅の授業ノートは6冊からなる。①解剖学総論・骨学・靭帯学・筋学、②血管学・神経学・局所解剖学、③組織学・生理学、④感覚器学・内臓学、⑤病理学、⑥有機化学、である。①は、敷波教授と藤野教授の担当で最初の2ヵ月のノートである。②は藤野教授担当で2ヵ月以後、④は敷波教授担当で2ヵ月以後の解剖学、③の組織学は敷波教授の担当である。魯迅の授業ノートを分析して明らかになったことがいくつかある。藤野教授による赤字の添削は、②のノートにのみ見られた。添削ではおもに書き落とした語句が補充さ

れ、文法と修辭が訂正されていた。また解剖学的内容についての注意書きもところどころに見られた。添削は血管学の冒頭から始まり、1年次後半の神経学、および2年次の局所解剖学でも続けられたが、最後の1ヵ月半ほどの部分には添削がなかった。

『藤野先生』では、書き落としたところがすべて埋められていたばかりでなく、言葉遣いの誤りまで、いちいち訂正してあったと描かれているが、その通りの添削が実際に行われていた。また藤野教授から前腕の血管の図で枝の描き方が間違っていると注意を受けて、魯迅は口でははいと答えたが、内心は承服しなかったと描かれている。それに対応すると思われる注意書きが授業ノートに見られる。後頸部の図では、「此の図中訂正すべきもの数多あり」という全般的な注意書きがあり、その2週間ほど後の大腿前面の図では

「此図の外股回旋動脈は内者に対して余り細く又其起りも高く過きる」という具体的な注意書きがある。注意を受けた部位と回数が違っている。『藤野先生』を執筆した頃、魯迅はノートを紛失して手元に置いて参照することができなかったので、この食い違いは記憶の錯誤によるものと考えられる。敷波教授が骨学を担当したのに、藤野教授がそれを担当していたと描かれていることも、事実とは異なる。その他、『藤野先生』の描写全体を通じて、事実と異なるところがいくつかあるが、いずれも記憶の誤りと思われるようなものばかりで、事実を故意に改変したと思われるところは見あたらなかった。

ところが『藤野先生』には書かれていないことがいくつもある。藤野教授の人格を称揚するのが作品の趣旨なので、それと関係のないことは書かれなくても当然であろう。しかし作品の内容に密接に関連していて、書かれていて当然の重要な事実が、いくつも欠落しているのである。魯迅はこれらを意図的に省略したとしか思えない。

まず、藤野教授と同様に魯迅の学習に気遣った敷波教授についての言及がまったくない。また魯迅と同時期に第二高等学校に入学し下宿も同じだった施霖という中国人留学生についても書かれていない。最初の頃はノートを清書していたが、2ヵ月ほどのところで清書を止めて筆録のノートを残したことも述べられていない。しかもこの清書から筆録への転換が、3つの授業ノートでほぼ同時に起こっており、魯迅の授業を受ける態度がこの時期に急変している。藤野教授から呼び出されて添削の始まった時期が、授業開始後1週間であるとする『藤野先生』の描写は疑わしく、実際には2ヵ月後であった可能性がある。

『藤野先生』の描写では、魯迅は仙台で孤独で

あり、誇り高い人間として描かれているが、これは同級生たちの証言とは大いに食い違う。『藤野先生』には描かれていないが、魯迅には仲のよい日本人の友人たちがいて楽しく過ごしていた。学校近くのミルクホールに入り浸り、芝居もよく見に行っていた。中国政府からの奨学金が潤沢にあり、経済的には豊かであった。『藤野先生』には、そういった日常生活に関することはまったく描かれていない。

魯迅が医学を止める決心をしたのは、細菌学の授業で中国人スパイを処刑するシーンがスライドで上映された時であると、『藤野先生』に描かれている。同級生たちの歓呼の声が胸にこたえたと描かれている。しかし医学を止める理由については、注意深く書くことを避けている。実は、授業ノートの分析から新たに判明したことは、冬休みを終わって2学期に入った時点で、医学を学ぶ意欲がすでに失われていたことである。最後の1ヵ月半ほど、魯迅は添削のためにノートを藤野教授に提出することを止め、また病理学のノートでもそれまで続いていた復習の赤字の加筆が、なくなっているのである。魯迅の心を医学から離れさせる原因は、冬休みに帰った東京での出来事に違いない。しかし『藤野先生』では、そのことにも触れていない。

魯迅は事実を改変してはいないが、いくつか重要なことを描いていない。そのために『藤野先生』という作品が与える印象は、微妙に事実とずれたところがある。魯迅は仙台で孤独な学生生活を送っていたわけでもなければ、細菌学の授業中に見せられた中国人処刑の場面のスライドが原因で医学を止めなくなった訳でもなさそうなのである。

(平成19年12月例会)